

総務文教常任委員会会議録

- 1 日 時 平成28年5月19日(木)
- 2 会議時間 10時00分開会 11時57分閉会
- 3 出席議員 委員長：高橋政悦 副委員長：鈴木孝寿
委員：北村光明、木村好孝、口田邦男、中島里司
議長：加来良明
- 4 事務局 事務局長：佐藤秀美、係長：宇都宮学
- 5 説明員 斉木学校教育課長
- 6 議 件

(1) 所管事務調査
学校現場における教育活動の状況について(道外視察事後調査)

(2) その他
- 7 会議録 別紙のとおり

議件（1）所管事務調査

学校現場における教育活動の状況について（道外視察事後調査）

委員長：（高橋政悦）皆さんおはようございます。5月10日からの道外視察研修はご苦労さまでした。本日の委員会は、道外視察研修の事後調査ということで、研修視察を終えて、各委員が考える本町の問題点や改善策など、視察先ごとに挙げていただき、必要により、学校教育課長の方から意見を伺う。斉木課長、本日はお忙しい中、ご出席いただきありがとうございます。さっそく議件に入る。

・秋田県五城目町【学力向上の取り組みについて】

委員長：研修内容に照らし合わせて、清水町としての問題点及び今後取り組むべき課題等を各委員に出していただき、それに伴って斉木課長よりコメントをいただく。

鈴木委員：五城目町の資料にもあったが、自己肯定率が非常に高い。夢や希望を持っている率が高いという部分が、今後の学力や生活においても前向きにやっていくための要因になっているのではないかと。清水町の場合の数値はわかるのか。

斉木課長：全国学力・学習状況調査の中で、教科以外の部分で生徒質問紙がある。その中で自己肯定感や規範意識を集計しているところがあるので、五城目町もそれを言っていたと思う。

鈴木委員：この部分の開示は可能か。

斉木課長：公に開示はしていないが、資料として委員会に提供することはできる。

鈴木委員：資料を提供していただければ、その後の議論も進みやすいのではないかと。キーはここにあると思う。

委員長：資料は後日開示をお願いします。

木村委員：全国と県は、高校入試と連動しているという位置付けがされている。そういう面では、県と各地域との連携が密接なのではないかと。鈴木委員が言われた、学校としての捉え方や生徒、児童の個人としての捉え方についても、おそらく県としての調査もしているのではないかと。そういう面では、各学校の教育状況を子どもたちや親がどう受け止めているのかは、親も変わるし、学年も変わると課題も変わってくるので、その都度町として現状を把握していく必要があるのではないかと。思う。

斉木課長：学校評価の部分では、先生、子ども、保護者それぞれにアンケート調査をしている項目がいくつかある。先生、子ども、保護者、それぞれを比べて学校便り等に載せている項目がいくつかある。載せていない部分は何らかの形でもらうことは可能だと思ふ。

委員長：実際、全国的に評価をするように指示があり、やっているところで50%台、普通のところは30%台に満たないところがあると思うが、清水町は全国レベルと同等レベルでやっているものなのか、学校独自でやっているものなのか。何らかの評価基準に準じてやっているのか、またはアンケートレベルなのか。

斉木課長：調査したことがないので把握はしていない。

木村委員：学校ごとに学校の教育課程があるが、特に総合学習が取り入れられてから地域との関連の教育課程があると思う。学校評価は各学校で毎年していると思うが、教育委員会に報告は上がってくるのか。

斉木課長：十勝教育局の指導訪問が年3回あり、そこで全国学力・学習状況調査の結果やその改善プラン、学校評価の部分も提示していたと思う。教育委員会には報告義務はなかったと思うが、指導訪問の際にはもらっている。

中島委員：3か所ともリーダーが強い責任や誇りを持ちながらやっていた。五城目町については住民との関わりについて重要視している部分では、ふれあいルームを設けて、住民が気軽に来られるようにしていた。地域に開かれた学校づくりを強く感じた。教室に入らなくても、その部屋で父兄同士が話し合えるので、開かれた学校になるのではないかと。言葉だけでなく、地域との関わりをどういうふうに教育委員会として、あるいは学校としてどうしてもらうのが一番いいのか。私は今まで地域に開かれた学校づくりは教職員が地域に出ることだと思っていた。いまだにその考えは変わっていないが、ふれあいルームという発想は全くなかった。学校を利用して地域の人が会話をするというのは素晴らしい。わが町も地域に開かれた学校の実行に向けて、これからどう取り組んでもらえるかと感じた。

委員長：中島委員から、本当の意味で地域とのつながりを密接にした上での学校運営に関わって、教育委員会としては今後どのような展開を見せてくれるのか。これは、教育委員会で話し合ったことではなく、即答は難しいと思うが、斉木課長の私見でよいので何かあるか。

斉木課長：学校は教育専門家としてのプライドをもって先生は教えている。今の時代の流れの中で「地域を含めて教育を」ということだが、教科については自分たちが自信をもっているので、地域住民にあまり入ってもらいたくないという意識がおそらくあると思う。しかし、地域の特性ある教育という部分では、先生は異動があるので、新たに来たばかりの先生にお願いするのは無理な話なので、地域住民に関わって何らかの教育をするのは必要だと思う。現状では、学習ボランティアとして地域住民の方が入っているが、書道や図書館の活用のお手伝いなどで、まだまだ教育の部分には入り込めていない。文科省でもコミュニティスクールや中高一貫教育を打ち出しているが、それは地域住民が伝統文化や風土、町民性などを義務教育の中に関わって教えていくべきだということも少し含まれているのではと思う。清水町はまだ方針が定まっていないが、今後、検討していく中では地域住民が地域の特性・特徴を含んだ清水町民に育てていくという教育をどこかに取り入れられれば良いなと思っている。

中島委員：特殊な職場だという発想が問題だと思う。教師も人で、習う側から教える側に立場が変わっただけ。ある部分では教育の現場からあまり出た経験が少ない。大学では積極的に社会に出るような取り組みをしていると聞いている。特殊な職場だという意識を強く持っているとなりに進まない。逆にいうと、ふれあいルーム等をつくってまずは住民と顔見知りになると、清水町の教育を考えた時に前に進められるので、今後の1つの教育課題にしてもいいのではないかと思っている。

口田委員：五城目町でいろいろな話を聞いた。教職員の問題で、現場での校長、教頭、教職員の和は本町としてはどうか。また、教育委員会やPTA、教職員の連携が本町ではどうかと振り返って反省する必要がある。この2点について感じたので、今後の課題としてほしい。

斉木課長：五城目町は校長や教頭の説明の中では、教職員が一丸となって頑張っていると言っていた。清水町も話としてはそうであるが、個人的な感想であるが、実際の雰囲気としては五城目町の方が連帯感があるようには聞こえた。

委員長：PTA、教職員、教育委員会のつながりの再確認及び校長、教頭、教員の雰囲気づくりにまで、教育委員会で確認、見直し等があれば意見を言ってもらうことをお願いしたい。

北村委員：五城目小学校の校長の話聞いて、子ども主体の教育をやっていると思った。福井県と比較して、福井県の方が教師主体の教育をやっているという言い方をしていた。清水町において、教育委員会や教員は全国一律の学力テストの評価と取り組みについて、どのような考え方や目標を持っているのか。また、先生が専門職としての意識を持つことは大事なことだと思うが、一般住民の意見を汲み取るという姿勢が必要だと思う。専門職という自覚がある職員は特にそういうことが必要だと感じるが、交流の場がないと思う。PTAの会員だった方も、子どもが卒業したら、PTAにはほとんど関わりを持たなくなり、意見反映の場がないという現状がある。そのような状況についてどんな認識を持っているのか。

斉木課長：1点目は、学力状況調査や学習全般でどういう目標や考え方をしているのかについては、各学校は教育目標や目標に対しての実施計画を毎年作っている。それぞれ学校ごとに校長が決定するが、4校ともペーパーで見えるようにつくっている。内容としては、どの学校も「笑顔の一番な子どもを育てる」などで、紙で比べると五城目町とあまり変わらないレベルでつくっている。学力状況調査の数値目標はない。あくまでも1年間を通しての学習や子どもたちの育て方の目標や計画は作っている。2点目の一般町民の意見を聞く場という部分では、制度としてあり、学校支援委員会という学校OBや校区の方3名にお願いしている。年3～4回、校長と意見交換をしている。

北村委員：中小一貫教育まではいっていないと思うが、中小一貫したものを清水町として作る必要性はないのか。

斉木課長：個人的な見解だが、清水町においては、農業だけでなく、農業関連産業である流通や加工業などがあり、そこで生業を得て町民が暮らしているウエイトはかなり大きい。根本となる農業に対して、子どもたちが正しい認識や誇りを持つことは必要だと思う。それを進めるとすれば、小中一貫で、例えば、南房総学のような形で地域のことを学ぶ取り組みがあるべきだと思う。

北村委員：学校支援委員会があるとのことであったが、実際には、支援をしたい人を集める働きかけをしているようにはあまり感じられない。学校の教育はできないが、他の職業の専門家でリタイヤした人などを生かす場が必要だと思っている。

委員長：五城目町については以上で終了する。

・特定非営利活動法人キーパーソン 21(神奈川県川崎市)【キャリア教育等について】

委員長：キャリア教育等について、清水町に照らし合わせた意見や質問はあるか。

鈴木委員：キーパーソン 21 では自分たちでプログラムをつくり、成果を上げている。14、15年かけて今の状況までできたのは単純にすごいと感じた。清水町では、Q-U以外で何か導入しているものはあるのか。要は、キャリア教育で職業体験はあるが、自己研鑽のプログラムは実際にはやっているのか。

斉木課長：総合的な学習が年間70時間あり、人として生きていく力を育てるため、探究的な学習、人と協力し合って何かをつくるというような授業をやっているが、評価もしにくいし、見えていない部分もある。地域のことを調べたり、地域の産物を使って特産品やメニューづくりをする取り組みは中学校で行っている。

鈴木委員：こういうプログラムは先生が嫌がる内容だと思う。先ほどのふれあいルームのところも含めて、帰結するところは、ボランティア組織をしっかりとしたものを含めて、今後つくっていきながら、子どもたちの成功体験を経験させてあげたりした中で、本人の適性を自分で気づいてもらえるような仕組みづくりをするのが一番いいのかなと思う。すぐにできるものではないが、北村委員の言った引退した先生方を生かす方法があるが、そういうボランティアのニーズはあるものな

のか。

齊木課長：ニーズはおそらく少ないと思う。このような取り組みを知らないと思う。保護者としては、子どもたちに将来どのような大人になってもらいたいのか、自己の人格をいかに目覚めさせるかということよりも、まずは高校入試が先行するのではないかと思う。清水町で実施しようとする場合、こういう方針でいくよと引っ張るような判断を誰かがしないと、事務局レベルからの導入は難しい。または、導入できたとしても主体的に動かないと思う。

鈴木委員：ボランティア組織をつくるにしても学校の先生と地域を繋ぐコーディネーターがいないと機能しない。また、人格的にも地域が認めた人でないと学校に入れることができない。

齊木課長：制度としては社会教育課が生涯学習ボランティアという制度をつくっており、その中で書道ボランティアや図書ボランティアなどを実施している。コーディネーターの設置は道教委の指定事業だったと思うが、最初の2、3年は人件費が出て、民間の方をお願いをして実施していた時期がある。予算がつかなくなると、実施のためのコーディネーターの機能は社会教育課が担っている。

鈴木委員：清水町のどこの学校でも言っていた要支援の子も含めて、きずな園など、清水の保育士はいわゆるグレーゾーンの見極めが他の町村よりも優秀だという話を聞いたことがある。早いうちの指導も体系的にはできているが、全般的にそういう部分と社会教育となると変わっていったりするので、体系的の一つつくり上げると、まとまったものができるのではないかといつも思っている。最後に帰結するのは、誰がどのようにやるかということになると、非常に難しくなり、リーダーの問題になってくる。清水町に当てはめると必要だが、すごく難しい。スポット的にはできると思うが、それをするためには基本の計画や考え方をきちんとしていかないとだめだと思う。

齊木課長：そのとおりで、基本的な方針が重要だと思う。ぶれないためにそこがないと継続できないし、実施内容が有効的なものにならない。

北村委員：齊木課長が答えた中で、ボランティアのニーズがないというのは先生方のニーズがないということだと思う。実際には、子どもたちにとってはニーズがあるのではないか。親たちの中には認識している人もいるかもしれないと思う。将来の清水町のまちづくりということであれば、将来の担い手をつくっていくわけなので、そのことにはある意味では行政的な課題でもあるし、どういきいきとした町として残していくかが大きなテーマだと思う。ある意味では、町民とともにまちづくりをするということであれば、優れたリーダーを望むことは否定しないが、リーダーが変われば変わるということだけではなく、町民側からも動きをつくっていくべきではないか。そのことであれば、鈴木委員が言っていたように誰かがやるしかないと思う。キーパーソン21のような取り組みについて受け止めるものがあつたので、講演会に来てもらう機会をつくっていく必要があるのではないか。その中で先生方や教育委員会、行政の考え方も変わってくると思う。

齊木課長：首長がやるということであれば、職員も動きやすく、物事を進める上では合理的だと思う。ただ、北村委員の言われた、町民全体がそういうような意識を持たないと、町全体として継続しないものになってしまう。

木村委員：学校教育に欠けている部分を見事に実践している。気持ちとしては、事業計画の中で、教員集団との関わりが重点になってしまったので、支援体制の部分で、例えば不登校の問題などの活動がどうなっているのか、もう少し聞きたかった。3つをとおして問題になっていると思うが、前の五城目町でも家庭環境、家庭学習のあり方が非常に問題となって、特別支援学級に行かない子どもが21名もいる。地域や家庭での特別支援についての条件づくりが非常に困難な部分が大

きな課題であると感じた。そういう面から考えて、不登校や悩んでいる子どもも含めた居場所づくりが、このような形で実践化されていく中で、学校や我々がどのように学んでいくかが課題になっていくのではないかと。本町の場合は学童保育という体制が受入口としては非常に広がっている。キーパーソン 21 の実践のポイントを当てた質的な部分で、居場所づくりや一人ひとりの子どもに対応する教育課題への挑戦について、学童保育を足掛かりに質的に高めていくことによって可能なのではないかという思いがある。新しいものではなく、今あるものの条件を変えていくことによって可能な部分も出てくるのではという思いがある。そういう面では、次の視察のところと合わせて教育委員会の一貫教育の体制づくりの部分が非常に勉強になった。

齊木課長：南房総市は大きな方針を持って一元化をして実践していくという整理がされていると思った。キャリア教育の部分をどう学校として取り組めるかわからないが、清水町の子どもをどう育てていくかという体制づくりが課題だと思う。

木村委員：そういう面では学童保育についても P T A と同じような話し合いの場が年に 1、2 回持たれている。そういうものも窓口にして、さきから課題となっているボランティアの問題も含めながら家庭での理解を広げていくことが必要なのかなと思う。特に、町内や地域というふうに広げていくということは、実態としては必要だと思う。

中島委員：キーパーソン 21 においては、全く新しい感覚で聞けた。今回、これは私的機関として捉えている。私的な部分であれば、ここまでできると単純に捉えた。公的な機関と私的機関の違いはすごくはっきり示されていたと思う。私的なので経営していかなければならないため、熱の入れ方も違うと感じた。キーパーソン 21 の代表は企業人としても素晴らしい方だと感じた。特に感じたのは、中身がどうのというよりは、自分が目指したものに対して、いろいろな方をこの中に呼び込んでいる。私は議員なので、まちづくりが基本だが、町民を巻き込んでという意向がここには全くない。目指しているものをどう実行していくかという手法を 1 つやっていると感じた。まちづくりでは、町民や学校が納得してくれなければ何もできなくなってしまう。私はここを視察してみて、これが清水町でつくれるとは思っていない。ただ、内容的には、一部分は学校でも使える部分があるのではないかと。教育委員会では、「教育の四季」も大事だが、これだけ幅広い教育の手立てがあるということのを参考にしてほしい。全部採用してほしいということではなく、できるところからやってみようか。木村委員が言っていたように、施設として学童保育所があるが、ただ子どもを預かるだけではなく、来ている子どもがわくわくするようなノウハウを持っている町民を入れる工夫はできると思う。この辺を今後検討してほしい。一つものを目指す時にまちづくりまで考える必要はない。子育てにまちづくりを利用する必要はない。子育てはあくまでも子ども主体なので、子どもがどう思うかという中で取り組んでもらいたい。その結果が必ずまちづくりや地域づくりにつながっていくと思う。

委員長：キーパーソン 21 の事業は清水町に当てはめるのは不可能だと思う。ただ、中身としては利用できるプログラムで、そのままねをしても心を深く覗けるプログラムは、自己確認のきっかけになると思うので、教育委員会でも取り組みやすいものについては積極的に企画してほしい。

口田委員：必要とされる人が本町にもいると思うが、だからといって組織づくりまでは本町でできないと考えている。必要とされている人には別な角度からカバーする方法を考えるほかに道はないと思う。最後に自然の問題を投げかけてきたが、過去に畜大の中野教授が中心となり、旭山の学校を中心に組織をつくっていた。例えば、不登校の生徒などを連れてきて、自然と土に触れて、日々過ごしても

らうことで子どもはすごく変わると。そういうようなものもひとつの方法ではないかということで、提案した。自然というのは、不登校や引きこもりの子どもには効果があると教えられた。

北村委員：教育や保育に関わっている方が自分の思いとして始めたと思っていたが、そうではなく、専業主婦の方が始めたことにすごく驚いた。だからこそ新鮮だったのかなと思う。最初から学校教育の場で考えたわけではなく、自分の子どもの教育の中でわくわくする、やりたいことを見つけるといふ子ども主体で考えていくことを真剣に考え、それを受け止めて実践してきた方だということで、すごい人だと思う。話を聞いて思ったのは、職業を知る、職業を体験するなどのキャリア教育が清水町ではされているのか。まずはそういうことから公的な教育の中でやってもらいたい。保護者一人ひとりの立場になってみると、朝山代表のように感じている人もいるでしょうし、そう考えないで、世間一般的に良い成績を取って良い学校に行き、いい会社に入って幸せな明るい家庭を築いてもらいたいと考えている親はいっぱいいる。本当にそれでいいのかというと、僕くらいの年代になってもこれから生きていくためにはわくわくして生きたいと思う。そういうわくわくエンジンという発想を見出したのはすごいと思う。この町にも何らかの形で実現していきたい。それがまちづくりになるかはわからないが、一人ひとりの人生に必要なではないか。要望としては、キャリア教育をまだやっていないのであればやってもらいたい。

斉木課長：キャリア教育は、清水町にある事業所や町民がどんな仕事をしているのかという部分は総合的な学習の時間で小・中学校で取り組んでいる。実際に3日間なり職業体験として役場に来たり、町内のスーパーに行ったりなど行っている。

委員長：休憩する。

【休憩 11時04分～再開 11時15分】

・千葉県南房総市【幼保小中一環教育の推進について】

委員長：再開する。南房総市についての意見と質問に入る。

鈴木委員：南房総市の子ども園に、勝浦市から40人くらい来ているという話があった。参考までに聞くが、例えば、新得町の子どもが越境して、清水町の保育所・幼稚園に入ることはできるのか。

斉木課長：制度上はできる。

鈴木委員：受け入れはするが、保育料は無料にはならないのか。

斉木課長：それは有料になる。

鈴木委員：子ども園で差別化を図るのは面白い。これは清水町にも導入できる。一番驚いたのは塾講師を学校に入れていくことは思い切った考えで、先生がそれを受け入れているという姿勢である。清水町で実施できるかは何とも言えないが、実施すると注目されると思う。清水町には個人でやっている塾が何件かあるが、大きなところに行くとすると帯広市や芽室町に通っているのが実際。そういう体制も清水町も意外に選択肢が薄くなっていると考えた。

木村委員：結果的には、課題がこれからどのように変わっていくのかという期待や面白さがあった。学校の統廃合をきっかけにして、新たな構想を立てて、幼保・小・中一貫となった。それに基づいて、新たなまちづくりをどのように展開していくのかも構想に描きながら、おそらくこれからの課題としてあげられている。清水町は学校の統廃合は終わっているが、地域の人々と地域の子どもの関係が、今後どのように少子化の中で形成されていくのかが、町としても課題になってくるのではないかと。以前、地域の農村の方と話した時に、地域の連帯が無

くなっている」と聞いた。少なくともなっているが、新たな人間関係や地域づくりをどのように課題として取り組んでいけるのか。

中島委員：結論的には、南房総市は教育をまちづくりにかなり強く意識をしながら考えていると感じた。教育を子ども主体として育てていく上で、地元に残る子という幅の狭い話ではなく、よそに行ってもという話もあった。余談的な発想だったと思うが、南房総市で学んで育ち、外に出てふるさと納税もしてくれるのではということで、これもまちづくりのひとつ。あくまでも子ども主体で育てることによって、結果的にそういうものが発生するのではという考え方ではないか。今回、教育長から説明を聞いた中で、市長がまちづくりの大きな柱に教育を前面に出している。教育長が町長の命を受けてしっかりとした教育を基本に、物事を考えていた。今、木村委員から出た合併を機にという話があったが、うちの町であえて言うならば、保育所と幼稚園、全ての建物が建て替え時期が近いうちに来るだろうと思う。合併ではなく施設の建て替えを前提にした協議に入ってもいいのではないか。私は基本的に少子化になればなるほど一貫教育が必要だと思う。保育所・幼稚園は子育て支援課でやっているが、学校とつながらなくなる。建て替えをきっかけにわが町の幼保小中一貫教育を委員会として協議を進めてもいいのではないかと感じた。町長と教育長のリーダー的な方針をしっかりと示した上で教育委員会で検討すべきだと思う。

斉木課長：個人的には一元化した方がいいと思っている。中島委員が言ったように、保育所・幼稚園が建て替え時期に来ている。第2子無料化となっているので、保育所と幼稚園が混然一体となって、1人目は幼稚園だが、2人目は保育所という例が町内であるので、保育所と幼稚園という区分けはいらないのではと思っている。子育て支援の中にうまく教育を取り込んで、小学校の教育に遊びからつながられるようになればいいと思う。教育委員会としては、幼保小連携に取り組んでいるので、今回の視察の中で個人的にそう思った。それを実際に誰が取り上げるのかという部分をいろいろと考えたが、例えば、議会で教育委員会に報告として出してもらえれば、教育委員会も検討せざるを得ないという立場になる。そこからスタートすることになるのではないかとと思う。

中島委員：議会として報告書の中で、執行側に意思表示をする必要がある。個人的には一般質問があるので、そういう部分では考えなければならぬと感じている。観光にも寄与しているという話をしていたが、一つひとつをやって実施していく中から出てきたことだと思う。最初からではなく結果として観光にも教育委員会として積極的にと言っていたと思う。基本は、子どもを育てるために自分たちがあと何をしなければならぬかということ、教育委員会の強いリーダーシップでしっかり話し合いを進めて取り組んでいかなければ、この形は難しいができないことではないと思う。この視察研修で、子育てをしっかりとすれば、まちづくりにつながるという確信を得た。

口田委員：こども園について、私は一度一般質問をして町長の考えを質したこともあったが、当時、町長としてはあまり積極的な答弁をいただけなかった。しかし、今回勉強して来て、本町の一貫教育を考えた時にまず手掛けなければならないのは幼保連携ではないかと思う。先ほど木村委員が言っていた地域と子どもの関係について、学校がなくなり子どもと地域の関係がなくなったのではないかという話だったが、旭山地域では運動会でも小学生・中学生が来てよさこいをやったり、一緒に走ったりしている。そういうことがなかったら、地域の人はどうな子どもがいるのかわからない。また、子ども縁日もやって、どこの子どもかわかるようになるので、本町としても総体的にそういった方向を進めていく必要があるのではないかと考えている。また、給食の関係だが、本町の地場産に対する取り組みは何度も言っているが、なかなか実現に向かっていない。

業者に頼んでどこの生産かわからないものを取り揃えているというのが現実なので、なるべく教育委員会が中心となって、なるべく地場産を積極的に取り入れる方法を考えてほしい。

斉木課長：野菜などの一部分は地場産だが、大量・多品種をどう確保するかということで、学校給食会で取りまとめをしたり、スーパーで調達している。取り組んでいないわけではないので、今後も充実させていけるように努力する。

口田委員：個々の農家ではなく農協に新鮮なものがたくさんあるので、話し合いの中でなるべく取り組むように努力してほしい。

北村委員：幼保一貫したものが必要ということから、育児、託児、保育も教育のひとつであるという位置付けをきちんとしてほしい。そのための組織づくりはどうすればいいのかわからないが、今以上に教育に関係して捉えるようなことをやってもらいたい。斉木課長が言ったような報告書を委員会として出してもいいのではないか。それから、中学、高校の先生と幅広い教育の経験を持っている人が教育長になっていることに驚いた。特に小中高連携として、人事交流もあるということにも驚いた。人事交流までいなくても、小中一貫教育と清水町にある高校の教育との連携を模索していく必要がある。そこを教育委員会や町として考えていく必要があるのではないか。また、教育に関する先生同士の交流が必要ではないか。小学校と中学校は何かの機会に交流があると思うが、高校はあまりない。清水高校に入ってくるのは清水中学校や御影中学校だけではなく、町外からも来るので、そこら辺の教育方針の違いが出ていると思うので、そういうところも考えていく必要があるのではないか。南房総市は、残っても離れても全国に太刀打ちできるだけの学力をつけさせるという明確な目標を言葉として掲げているので、そのためには民間の学習塾も利用（バウチャー制度）している。清水町がそこまでやる必要性があるかはわからないが、明確な目標は必要だと思う。

・全体をとおして

委員長：全体をとおして何かあるか。

鈴木委員：南房総市では、子どもたちの学力を上げる取り組みをするということは、最終的には、若い世代が入ってくることにつながることを前提にいろいろと政策を考えられている。清水町とは直接比較できないが、どの事業においても最終的にはそこにつながっていくし、そこをメインとして考えたらそういう政策も納得できる。

北村委員：小中高の学力・人間形成も含めた教育のところは、少なくとも十勝管内の有名校を想定しながら勉強させたりしている親もいると思う。また、清水町で育ったので、小学校、中学校、高校は清水町でいいと考えている親もいると思う。そういう中で両方に通用するような方針を教育委員会として持ってもいいのではないか。清水高校のことも想定していいのではないかと思う。

鈴木委員：清水町も五城目町や南房総市と比べても遜色のないところはたくさんあり、優れているところもたくさんある。清水町の小中学生の学力は全道でもトップクラスだということらをまちづくりをする時にどんどん出すべきではないかと思う。ネットで南房総市を見ても「どこに行っても通用する教育」であったり、秋田だったら「日本一の学力」ということでやっている。清水町はほかと比べても高いが、特色があるわけではないので、なぜ高いのかわからない。もっと宣伝・PRすることによって、教育に対する保護者や先生に良いプレッシャーになって関心がより高まっていくのではないか。

斉木課長：出した方がいいと思う。ただ、学力の部分は点数を出すと生々しい部分があり、

言葉で「全国平均を上回っている」としている。それがどこまでインパクトがあってアピールできるかという点、なかなか難しい。教育環境で言えば、例えば人的配置などは五城目町よりいいと思う。

口田委員：出すのは賛成である。グラフで出してはどうか。

斉木課長：教育委員会が出すのと移住として出すのでは受け取る側のインパクトが違う。教育委員会では一応出している。グラフも北海道のホームページに清水町のページがあり、そこに結果がグラフとして載っている。どうしたら効果的に届くのか、出し方と出す場所を考える必要がある。

鈴木委員：問題なのは、なぜ清水町はトップクラスになっているかの原因がわからない。

口田委員：悪い場合を調べてみてはどうか。

鈴木委員：子どもたちの伸びしろがあるのであれば、それを発見してあげるお手伝いができればと思う。まずは、宣伝とともに検証と提言につながっていくと確信している。

委員長：私がこの3か所視察をして感じたことは、キーパーソン21は別として、五城目町や南房総市の方針と方策等については清水町とはあまり変わらないが、細部にわたってはそれぞれ工夫があり、特色を持っている。清水町については、あまりその特色が見受けられない。特色のないところがたとえ学力が高かったとしても、魅力を周りの人に発信する材料にもならないし、たまたまだと感じとられる。清水町で学べば「こんなふうになる」という結果は何年も先じゃないと出ないことであっても、こういうカリキュラムでやっているという確固たる方針があったら、それは宣伝しても構わないと思う。ただ、全国学力テストは千葉県南房総市で「全然参考にならない」と言っていたように、学力テストの結果で一喜一憂してはいけないと思う。本当に実力があれば別であるが、多方面で活躍する人が出て、はじめて世間的に実力を認めてくれるものである。3か所とも細部にわたってはとてもよく、参考になる部分も多々あったと思う。そこをどんどん改善していけるよう、各委員の意見を踏まえた上で、委員会報告として上げたいと思う。

中島委員：先ほど、鈴木委員が言っていたわが町は遜色がないという部分はそのとおりだと思う。なぜそれを地元において感じないのかは組織がバラバラだからだと思う。まとめられるものはまとめて発信してはと感じている。この町は学習優秀な町であると歴史が物語っている。ただ、それが少し落ちてきたのはいろいろと事情はあると思う。過去には転勤族がおられて、家族連れで清水町に入ってきて、中には都会の方から移動してきた方もいるので、刺激された部分もあったと思う。これからは、小中高、もしくは中高の連携も図っていく必要があるのではないかと。そのためには組織をわかりやすくして、わかりやすい発信を目指してもらいたい。子どもが中学校を卒業するまでに窓口が3か所あることに疑問を持っている。先ほど斉木課長から出たが、一貫教育という部分で、調査項目ではないので今は話し合いができないので、この辺で区切るが、こういう方向性でまとめる機会があればいいと感じた。

委員長：今回の道外視察研修の報告は、本日の各委員の意見を網羅してまとめたいと思う。中島委員が今言われたように、報告書に対する答申はないが、ぜひここはということを経済委員会に申し入れるような会議を開きながら、再度申し入れるということにしたいと思うがよろしいか。

(いいの声あり)

委員長：議件1の所管事務調査の関係については、2月10日に行われた本町の4小中学校の調査内容も含め、委員長、副委員長でまとめて提出したいと思う。また、今回の道外研修の報告書を各委員が出すことになっているが、5月24日が提出期限なので、本日の内容等を精査しながら、それぞれ研修報告書の提出をお願い

する。

議件（２） その他

事務局長：視察研修の決算報告を行った。

【休憩 11時56分～再開 11時57分】

委員長：本日の委員会を終了する。濃い会議になったと思う。本日はご苦勞様でした。